



オルフェの会 アーリークリスマスコンサート ご挨拶
(左)清水 恭一 (中央)佐々木 征行 (右)理事長 鶴岡 広



No.48 (令和6年)

社会福祉法人 鶴風会

東京小児療育病院
西多摩療育支援センター
後援会

連絡先

〒208-0011
東京都武蔵村山市学園4-10-1
電話 042-561-2521 (代表)
東京小児療育病院
Eメール tcrh@kakufuh.com

理念

私達は
障害児者の生命機能の維持
向上と生活援助のための誠実な
積極的取り組み障害児者と
その家族を支援します

「Beyond」コロナ 時代に向けて

社会福祉法人鶴風会
理事長 鶴岡 広

新型コロナウイルス感染症は、未だに時折クラスターが発生していますが、昨年五月に五類に引き下げられ、暗く長かったコロナ禍の出口も見えてきました。規制の緩和により昨年十二月、四年ぶりにオルフェの会を開催することができました。久しぶりに皆様にお会いできたこと、大変喜ばしい限りです。この四年間、色々な変化がありました。鶴風会においても、理事長、東京小児療育病院院長と西多摩療育支援センター長が新たに就任し、ご挨拶をさせて頂きました。

このコロナ禍の間、感染拡大予防、隔離や三密回避の目的で始まったオンライン会議やリモートワークなどインターネットの

- 1頁 「Beyond」コロナ時代に向けて
- 2頁 日本は「世界寄附指数」が極めて低い
- 3頁 東京小児療育病院だより
- 4頁 西多摩療育支援センター
設立20年記念事業シンポジウム開催報告
- 5頁 2023年度行事報告
楽ニコの年中活動
- 6頁 チャリティーコンサート「オルフェの会」
- 7頁 寄附者名簿
- 8頁 寄贈者名簿

利用が、瞬く間に進化しました。これら情報通信の活用が医療や福祉においても広まったように思います。

当法人の西多摩療育支援センターでは、施設行事「センター祭」を、近隣の施設とインターネットで繋ぎ、リモートで三密を避けながら合同開催しました。従来ならば、心身障害や健康状態を確認する入所前面接は訪問して行うところ、オンラインでの実施に切り替え感染予防に配慮しました。

また、コロナ蔓延時の感染防止策で、入所者と家族の面会を制限しなければならぬ施設隔離期間に、インターネットのテレビ電話を利用して、家族との触れ合いを保つ工夫をしました。

従来なら考えてもいなかった情報通信の活用が、最初は仕方なく、しかしながら、いつの間にか継続的に計画的に活用されるようになりました。

報道によりますと、今年の秋頃から、マ

インバーカードを利用したマイナ保険証の本格運用が計画されていること。また、四月の診療報酬改定では、医療・看護におけるDX情報活用やオンライン診療などの情報通信の利用が評価されます。医療・福祉の分野において変化の予感がします。

情報通信の利用は、医療や福祉の情報共有がしやすくなる、手続きが簡略化できるといった利点がある反面、個人情報セキュリティに問題があります。標準化や画一化が、地域や個別の事情などが考慮されず、多種多様な障害を持つ障害児者援助の障壁にならないか、危惧されるところです。

ポストコロナを迎え、コロナ禍に発展した新たな感染症対策や情報通信の活用が、医療福祉の取り巻く環境を再構築し、障害児者や家族にとって、新たな日常の一部となり、生活を豊かにするものにすることを望みます。

鶴風会としても「Beyondコロナ」時代に対し新たな体制で知恵を絞り、工夫を行い、障害児者とその家族のための医療・福祉援助を行ってまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

日本は「世界寄附指数」が極めて低い

社会福祉法人鶴風会後援会
会長 青木 継稔

私が当法人の後援会長を拝命して7年が経過しました。当時の理事長の中原厚先生から、五島瑳智子先生のご逝去により後援会長が空白となっていたので引き受けて欲しいとの依頼がありました。東邦大学理事長の炭山嘉伸先生からのご推挙もあり引き受けさせて頂きました。後援会の役目は、当然重症心身障害児者（以下重心児者）とご家族を支援することですが、重心児者の医療・療育・福祉・教育・生活等を支える多くの医療系職員を応援すること、さらに建物、施設、設備、医療機器、備品等への支援も重要な任務です。結論から申し上げます。限り寄附金を募り、支援物資を確保することに努めます。

バザー、チャリティコンサート等を実施して皆様からの暖かいご支援を頂き、年間平均して二五〇〇〜二〇〇〇万円位の応援を頂いております。亡くなられた方やそのご家族から思いがけな

い多額のご寄附を頂くこともあります。さらに、一〇〇万・二〇〇万という高額なご寄附を頂くことも稀ではありません。ありがたいことと感謝申し上げます。これらの寄附金は、施設の修理や医療器具購入の補助、職員の海外研修補助等に役立させて頂いております。また、後援会としましては古くなった建物の建て替え等に巨額な資金が必要であり、そのための費用備蓄のために資金を確保したいと思えます。以上のごとく、当法人後援会の寄附金の年間平均額とその主な用途についてご報告申し上げます。ご寄附下さった皆様への御礼の言葉と致します。

『日本人は寄附しない民族』と言われる。イギリスの慈善団体が毎年発表する「世界寄附指数（寄附金、人助け・ボランティア活動の総合ランキング）」の最新2023年度版によれば、調査対象となった142か国において日本は何と139位でした。今回に限らず、日本は毎年下位に甘んじているのが現状です。2022年は下から2番目、2021年は最下位でした。日本のGDP（国内総生産）は、米国、中

国に次いで第3位であるにも拘らず、この「世界寄附指数」がこんな低位なのは何故でしょうか。本日に日本人は、寄附や人助けに極めて消極的な人種になっています。昔は、自分が貧しくてもさらに貧しい人達には恵みを施していたと思うのですが……。大家族であった頃の助け合っ心、隣人愛などが普通でしたが、今は核家族化してしまっただけで、隣は何をする人ぞ全く付き合いがないことなどの生活様式になっていることも影響しているかも知れません。

理由の一つは、小さい頃の体験、寄附に対する教育が日本では足りない・欠けているのではないかと専門家は指摘しています。学校教育におけるボランティア活動や社会貢献の経験が少ないか、ほとんどないという今の日本の文化があるとのこと。欧米諸国は、学校におけるボランティア活動が日常茶飯事に週1回とか月に数回とか実施されていたり、教会活動の環境としてボランティア活動が行われ宗教文化としての社会貢献活動が根付いていることが大きいと指摘しています。

また、寄附することやボランティア活動などの社会貢献は寄附する側や色々として施しをする側の心理的变化・寄附して感謝してもらったことなど社会貢献をしたという幸福感や満足感も大切であると思われま。

私は、小学校高学年のころ、中学校生のころ、高校生時代のクラブ活動等で、募金箱を持つて街角や駅前に立つたことが何回もありました。学校教育の一環として、赤い羽根募金（10月初め）に協力して「赤い羽根募金よろしくお願いします」と走り回ったことを覚えています。数十人に一人位が募金箱にお金を入れて下さいました。今は、婦人会やボランティアの人達が募金活動していますが、小中学生の姿はほとんど見かけません。こういった体験は、生涯にわたって寄附やボランティア活動などの社会貢献をするという意欲・意識に繋がって行くものだと思います。

文部省や各都道府県市町村の教育委員会、学校教育の中に、ボランティア活動の実施、寄附活動等の社会貢献をもっと多く積極的に取り込むべきではないかと考えます。

もう一つは、寄附金の「中抜き問題が大きく影響」しているとも言われます。集まった寄附金を持ち去るか他へ流用されてしまうこと、さらには人件費として使われてしまうことへの不信感・不満が根強いかもしれませぬ。過去に大きな社会問題となったことは記憶に新しいと思います。折角寄付しても何の役にも立たないと思つてしまふ人は多いのではないのでしょうか。近年のNPO法人の多くは、寄附金により賄われています。NPO法人が集めた寄附金の約50%は人件費と言われています。寄附金の中に人件費が含まれることを理解して寄附する必要があると思います。さらに、頂いた寄附金の使途を説明する必要があります。この説明が欠けることが多いのでは、寄附する側にとつての不満が多くなります。

以上、日本人の寄附が極めて少ないことに対する問題を取り上げてみました。

本法人に対するご寄附活動は順調に推移しています。どつぞいつでもご支援下さいますようお願い申し上げます。継続こそ、力なりと言われます。どつぞよろしくお願ひ致します。

東京小児療育病院

だより

東京小児療育病院
院長 佐々木 征行

2020年に始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行は丸4年経過しました。23年から24年にかけての冬はインフルエンザとCOVID-19の両方が国内で流行しました。重症化率は下がり「普通の風邪」になりつつあるものの感染力が強いので油断できません。当院では持ち込み発症が少数あったところ、24年1月から2月にかけて1個病棟でCOVID-19のクラスターが発生してしまいました。幸い重症化する方はほとんどありませんでした。以前ならすべての病棟を閉鎖するところでしたが、今回は他の3個病棟では短期入所を継続し、病床稼働率を大きく落とすことなく病棟運営を続けることができました。

今回は重症心身障害児者に対するACPについて記載します。

当院では長期入所されている利用者お一人お一人について、多職種による

ケース会議を毎年1回開催しています。利用者のこの1年間の状況や問題点を挙げ、各職種の対応などについて意見交換をしています。その結果をご家族（保護者）にお伝えし、現状や将来のことを共有する機会にしています。現在の体調や今後予測されることをお伝えし、それに対して必要な医療的な処置について確認させていただくこと、た医療的なことだけでなく、ご本人が今できることや楽しみにしていること、これからしてみたいことなどを皆話し合つてその実現を目指すことも大きな目的です。

これはまさに厚生労働省が最近旗を振つている「人生会議」にあたります。英語ではAdvance care planning（ACP）と呼びます。一般的には、高齢者や様々な重篤な疾患を持つている方が、できれば元気なうちに、本人の価値観や人生の目標、今後受けたい医療・ケアについて家族や医療者と繰り返し話し合い、その思いを共有する取り組みとされています。

当院では22年度より多職種からなるACPチームが立ち上がっています。ガイドラインの確認や問題点の整理を

初年度行い、23年度は院内全職員対象の研修を開催し、ケース会議での話し合いの運用を開始しました。研修として、島根大学医学部の大野智教授にACPの基本について桑原ホールで講演していただきました。

ご自身に判断力のある成人とは異なり、意思を示すのが困難な小児や重症心身障害児者ではいろいろな難しい面があります。ある治療法の選択をするとき、それをご家族に委ねてよいのか、その選択肢を望むのはご本人なのかご家族なのかなど悩ませられる機会は少なくありません。ACPを通じて、これまで以上にご本人やご家族が有意義な時間を過ごしていただけるよう、これからますますの職員が支援を続けていきたいと思います。

西多摩療育支援センター 設立20年記念事業 シンポジウム開催報告

西多摩療育支援センター
センター長 清水 教一

西多摩療育支援センターは、2024年4月に開設から20年を迎えます。それに先立ち、去る2月17日(土)に「あきる野ルピア」の3階ルピ

アホールにて「西多摩療育支援センター設立20年記念事業シンポジウム」を対面とオンライン配信のハイブリッド形式で開催いたしました。

20年目という大きな節目を迎えるにあたり、「私達に何ができるか?」「いや」「何をやらなければいけないのか?」を考えた時に、「福祉や教育との連携」は非常に重要な課題であるとの考えに至りました。そして、それを具現化できる場を設けたいと思い、今回のシンポジウムを企画しました。「医療」、「福祉」ならびに「教育」の各専門家にシンポジストとなっていたいただき、それぞれの立場から見た「連携」についてお話しいただきました。メインテーマは、「一人一人の子どものための医療、福祉、教育の協働」といたしました。シンポジストは、福祉部門はあきる野市障がい者基幹相談支援センター 所長の加藤暁子先生、教育部門は東京家政大学児童学部初等教育学 科学科長・教授の半澤嘉博先生、そして医療部門には東京都立松沢病院 病院長の水野雅文先生、子どもと家族のメンタルクリニックやまねこ院長の田中哲先生、西多摩療育支援セン

ター 医師の吉野邦夫先生の計5名の先生方をお願いいたしました。また本シンポジウムはあきる野市の後援を受けて行われました。

シンポジウムの司会は、私清水が務めさせていただきました。まず加藤暁子先生が「あきる野市の福祉の現状と今後」との題名で、障害者手帳所持者数等や障害福祉サービ入事業の状況等の現状と地域の課題についてお話されました。続いて吉野邦夫先生が「医療から未来に向けた協働、幼少期」との題名で、神経発達症と診断される子ども達が増えていること、膨大な療育ニーズを賄うためには医療機関、福祉事業所、教育機関などの連携協働が必要な事、神経発達症を有している子ども達への対応の考え方等を話されました。3番目は田中哲先生が、「医療から未来に向けた協働、学童期思春期」と題して、子どもを育てるにはコミュニティの存在が重要な事(田中先生は「村」と称されていました)。現在の子ども達の育ちをめぐる問題点、支援を必要としない子ども達への関り、そして未来に向けて大人たちの協働が重要な事などを話されました。4

番目は半澤嘉博先生が「教育から未来に向けての協働」との題名で、教育者のお立場から、障害のある子ども達の学校教育においては医療や福祉との連携が重要な事、個別の教育支援計画を作成して各専門分野で情報共有を行う事の重要性を、そして教育現場ならびに連携に向けた課題についてお話されました。そして最後は、水野雅文先生が「医療・教育・福祉の協働」と題して、児童や思春期の若者で精神疾患や自殺者が増えていること等の課題からメンタルヘルス教育や高校の学習指導要領の改訂、そして子どもの精神的幸福度向上に向けた取り組みの紹介、さらに移行期医療に関してまでお話しされました。

当日会場参加者は76名で、ルピアホールはほぼ満席状態でした。その他に36名の方がオンラインで御視聴されました。参加者は、医療関係者に加え、小学校・中学校の教諭、教育委員会等の教育関係の方々、保育園、放課後デイサービス、療育施設や福祉園などの福祉関係の方々、患者(親)会の方々、そしてあきる野市役所、子ども家庭庁などの行政の方々など、まさに



20周年記念事業開会式で挨拶されるセンター長清水教一

医療、教育、福祉のそれぞれの御専門の皆さまでした。この様に各分野の専門家が一同に会する機会を設けることができたのは、かなり斬新的な試みであつたと思つております。

各シンポジストの先生方の熱きプレゼンテーションに聞き入り、最後の総合討論では福祉関係、教育関係、そして親の会の参加者から質問が寄せられ、活発な議論がなされました。シンポジウムの時間が少し伸びてしまいました。個人的にはそれを感じさせないほど充実した時間を過ごすことが出来ました。今後の西多摩療育支援センターの重要な課題のひとつは、今回のシンポジウムを最初の一步として、医療・

教育・福祉の連携において私達が果たすべき役割を見出し、そしてそれらを実行していくことであると考えております。

2023年度 行事報告

東京小児療育病院
生活支援担当科長 渡辺 明彦

新型コロナウイルス感染症も5類に移行したことで、私たちの生活もそれまでの窮屈な思いから少し緩和されました。面会も直接出来るようになり、ご家族の方が病棟にお見えになることも多くなりました。病棟の中は以前のよつな活気も戻ってきました。

利用者の行動範囲も拡がり、グループ外出ではそれまでのバスハイクから大型ショッピングセンターで自由に買物を楽しんだり、遊園地や映画館などに外出したグループもありました。

今年度も活動推進プロジェクトを継続し、その活動の中で今まで提供してきたもの以外で「新たな活動」を提供していくことにし、実施に向けて検討を重ねました。その結果、3つの活動を実施していくことになりま

した。

1つ目は「このぼりを泳がせよう」ということで、中庭に職員から寄せられた数十匹のこのぼりを泳がせることができました。

2つ目は「日帰りバスツアー」を企画しました。たくさんのお募者の中から今年度は4名の方がこのツアーに参加し、大型観光バス（リフト付き）を貸し切り今年度はアクアパーク品川に行き、水族館とドライブを堪能することができました。

3つ目は「個別外出」の支援策として職員の付き添いを行っていきます。これは利用者・ご家族が個人で計画した外出企画に職員の付添いが必要とする場合は申請することで付き添いが可能になります。今年度の実施はまだありませんが、今後これを利用することで外出の機会が今よりも多くなることと思ひます。

その他、季節の行事として4年ぶりに花火大会も実施出来ました。また、施設行事であるみどりまつりも以前よりは小規模ながらも和太鼓やフラダンスなど外部の方を招き、久しぶりに大勢でにぎやかに楽しいひと時を過ご

事ができました。

この間に感染症の流行がなかったわけではありません。その影響で残念ながら一部は病棟は行事に参加できなかったこともありましたが。そのよつな時にはZOOMを使用した病棟へ配信を行い、行事で使用したグッズを病棟へ持ち込んだりと別な方法で楽しめるよつな工夫をしながら進めてきました。「状況がコロナ以前に戻った」ではなく「コロナ禍により進化した」と思ひ、今後も前進していきたいと思ひます。

楽irooの口中活動

西多摩療育支援センター
生活支援部 楽担当係長 佐藤 健次郎

楽通所i:roo（以下i:roo）は、地域で暮らしている主に身体障害のある方を対象に、楽生活介護の定員を増やす形で、平成30年に開所し現在7年目を迎えています。（日々定員12名、登録者13名）

i:rooで大切にしている事は、利用者の皆さんが通所での生活を自ら作り上げていける様に、お手伝いする事とそれに伴つ個別の支援になります。

色々な方が通所される場であり、一人一人の目標に添って色々な活動を行う場がニッポンです。その為、毎月聞き取りを行い目標の振り返りや活動の希望等を確認している事が特色と言えます。

定期的に行っている活動は、楽入所と合同のはたらく活動、あおぞら工房、毎月の活動内容を皆で話し合っで決める、活動ミーティング、お便り作り、体操、1日外出等があります。その他、TikTokやTHE FIRST TAKE等の流行りの動画制作や染め物・ファンレター作り・音楽フェス・季節の創作等、個々の希望に添った活動もあります。また、今後の生活を見据えオンラインで当事者団体や他サービス事業所との勉強会、同じ生活介護の事業所間交流等も行っています。

活動を展開していく上で最も意識している事は、利用者の皆さんと一緒に作り上げていく点です。利用者のやりたい事を聞き取る際に視覚的か聴覚的なのか等、その方に合った方法で確認する・工程を簡単に提示する・見本を提示する等の工夫もしています。お互いにやりとりしながら少しずつイメージが出来てくる中で、他のメンバーからの

発想も加え形作っていきます。その様なプロセスを繰り返しながら、楽しくも新しい発見が感じられる様な活動を目指しています。



個々の希望に添った活動の様子



利用者の皆さんは、自身の企画した活動は意欲的に取り組まれている事が

多いです。また、メンバー間でそれぞれの好みも把握されている事もあり、『今日の活動は〜の企画だね』と話され、自分の企画以外でも一緒に楽しめる事も増えてきました。今後も利用者の皆さんの目標に沿った日中活動が継続でき、通所生活がよい良いものになる様に取り組んでいきたいと考えています。

チャリティーコンサート 「オルフェの会」

法人事務局

当法人後援会が主催する歳末チャリティーコンサート「オルフェの会」を、4年ぶりに令和5年12月3日（日曜日）にグランドプリンスホテル新高輪国際館パミールにて開催いたしました。

はじめに、当法人理事長の鶴岡から、開会のご挨拶と、令和5年4月から就任しました東京小児療育病院院長の

佐々木と西多摩療育支援センター長の清水を壇上から紹介しました。その後、御来賓を代表して、炭山嘉伸先生（学校法人東邦大学理事長）のご挨拶を、

高松研先生（学校法人東邦大学学長）から代読された後、ご挨拶も頂戴し

ました。続いて額田均先生（東邦大学医学部東邦会）からご挨拶を頂戴し、盛田俊介先生（東邦大学医学部長）から乾杯のご発声を賜りました。館田一博先生（東邦大学教授）から、感染症の近況について、お話を頂戴しました。

プログラム第一部は、三遊亭楽生師匠の落語に会場中が笑いによる和やかな雰囲気につつまれました。第二部は、池田直樹・池田早苗ご夫妻の飯田俊明のピアノ伴奏による、会場にいる参加者からのリクエストにお応えするコンサートで素敵な歌声を披露していただきました。コンサートのエンディングには、会場にいた全員で『今日の日はさようなら』を合唱しました。

最後に、当法人後援会の青木会長より閉会のご挨拶として、オルフェの会が再開出来たことへの御礼を申し上げ、幕を閉じました。

当日は200名を超える皆様にご来場いただけただこと、また、会場にはお越しなれなかった方々を含む、多くの皆様からご支援を賜り、役員および職員一同より心から御礼を申し上げます。

次回は令和6年12月1日（日曜日）に開催することを予定しております。

社会福祉法人 鶴風会へ
寄附者(二)芳名

令和5年7月(令和6年2月)
505名(五十音順・敬称略)

青木 継稔・青木方智子・青山 幸生
青木りう子・青木 美澄・赤星 恵子
浅坂 美和・阿部 正和・安達 久夫
安部 良治・荒井 陽子・荒木眞佐子
赤沢 麻美・赤木 勝友・浅井 浩司
浅子 薫衣・浅沼 良寛・浅川 恭行
足高 毅・足立 嘉子・朝山 裕
朝川 孝幸・朝日恵美子・明間 邦子
有村 章・飯塚 綾子・池田 修一
市原 克己・伊藤 治男・伊藤 泰広
岩淵 聡・伊藤 圭子・伊藤 正俊
井上 英治・井上 昌光・井上 美俊
井上 和子・一戸 富子・一林 繁
稲垣 登稔・岩瀬 七重・岩村 吉晃
五十嵐良典・五口市 敬・五口市緒里枝
今井 晃・石垣 朋子・石原 幾子
石原 学・石川 至・石塚 博子
石田 哲朗・石井 昌之・泉水 昇
飯国紀一郎・飯国 弥生・飯国洋一郎
飯村 誠・飯塚 卓・臼井 雅美
白井 彰・宇佐見康郎・宇野久仁子
瓜田 純久・海野 俊雄・上田 建
上田 守三・植田 桂子・内山 利満

梅田みほ子・梅田 嘉子・梅田 嘉明
梅田 正法・海老根伊佐子・海老原健介
江元 智子・江田登茂治・江部 寛
榎本 和子・遠藤 英子・枝松 秀雄
大江 容子・大高 敏子・大場 圭子
大場 幸延・大塚 周二・大塚 淳子
大島 剛・大島 眞理・大高 究
大川 貴子・大久保敦司・大舘 一彦
岡本 恵子・奥秋 保・奥住 一雄
奥井雄一郎・沖野 佳子・尾立 篤子
乙幡 和明・岡田 倫明・岡島 行一
岡島 行伸・岡島 晶子・及川千代子
小川 昭子・小川 正俊・小原 明
小原 桂子・小畑 恵子・小野 聖子
小澤 翠・太田 宏樹・太田美つ子
加藤奈津子・加藤 秀徳・加藤 聡彦
加藤 知子・加藤 葉子・金澤 昭
神谷 節子・河上 修・河村 康明
河村 裕子・河野 喜一・梶山 祥子
鎌田 直子・金坂伊須萌・金子 康子
金子 明寛・金親 正敏・金杉 靖子
甲斐 俊吉・鹿島田忠史・狩野 修
春日井正典・勝負 千明・勝瀬 明子
神田 悠美・菅野 訓子・菅野 俊一
菅野 壽子・川本 七郎・柏崎 操
壁谷 春江・壁谷 靖夫・涓原 博
岸 恵美子・鬼頭 秀明・木下三和子
木村 丹・木村 裕・久具 佳子

久保 初美・久保田千文子・久保田伸枝
久保田和博・熊谷 良子・栗田 実
桑原 利草・黒瀬 嘉幸・黒木 貴夫
倉根 理一・月花 亮・是枝誠太郎
許斐 貞子・近藤 弘子・向山 秀樹
向山 徳子・幸田 文一・小柴 弘巳
小柴 裕子・小西 冬海・小泉 美子
小泉 蓉子・小池 牧子・小竹原安見
小竹原良雄・小峰八ツヨ・小林 格
小林純一郎・小林 寅喆・小林 令明
後藤 薫・五島 博樹・後藤加寿美
齋藤 登・齋藤 房道・齋藤 長則
齋藤 洋子・佐々木征行・佐々木徹郎
佐々木道子・佐々木裕美・佐久間理恵
佐多 由紀・佐地 信子・佐藤 艶子
佐藤 重雄・佐藤 俊郎・佐藤 信一
佐藤 信秀・佐藤 大祐・佐藤 朋己
佐藤 洋子・坂本眞理子・境 りえ
鮫島 寛次・鮫島 桃子・酒井 一夫
酒井 謙・酒井 康弘・西條 公勝
澤井 寛人・眞田 喬子・眞田 壽彦
柴田 京子・柴田仁太郎・清水 教一
塩野 毅・塩野 久子・塩野 則次
四宮 雅子・志村 博基・志鳥眞理子
獅山富美子・篠 昌治・篠 繁市
柴 忠明・柴 迪子・首藤さち子
新海 雅貴・新谷 義克・正田 嘉子
正田 穂積・清水 一輝・清水 義勝

清水 友理・島田 長人・島田 敏雄
島野 光・白井 久己・炭山 嘉伸
炭山 朋子・鈴木智恵子・鈴木 美帆
須貝 研司・須田百合子・杉 薫
杉本 寛子・鈴木力子・鈴木 秀明
鈴木 信介・鈴木 達夫・鈴木 忠子
鈴木 雍人・千 哲三・関口 義明
石北 隆・善方 淑子・袖山 昌子
袖山巴恵子・多田 周右・高木 真一
高橋 和美・瀧口 千枝・田中 芳夫
高橋 一博・舘野 香織・舘野 昭彦
舘田 一博・舘野 香織・舘野 昭彦
高橋 実花・高橋 和俊・高橋 正
高橋比路美・高月 誠・高須 信美
高村 安子・高木 利明・高松 研
高木 芳夫・高野 恭子・多胡 博雄
谷口 利江・谷藤 誠司・竹内 忍
竹内 真一・田口 康正・田村 和子
田中 政信・田島 政晴・田畑 友美
田邊 勝男・武村 保栄・武田 尚明
武田 毅・武田 晶子・築山 蔵
月本 一郎・月本 伸子・津賀 節子
津久田康成・塚原 英基・塚原 洋子
辻本公美子・坪井久美子・堤 俊一郎
刀根 千鶴・戸谷 夏子・所 常明
東條 賢一・友田眞知子・朽久保哲男
中村 光一・中村 道子・中岡 義明
中村みゆき・中村志津子・中村俊一郎
中村 豊・中村 友美・中谷 尚登

中園 尚子・中島 桂子・中島 末美
 中島龍一朗・中野 太郎・中里恵美子
 中澤 一治・中澤 隆一・長岡 貞雄
 長山 徹・長船 宏隆・長田 幸枝
 長田 囃雄・長畑 節子・長尾 二郎
 長澤 貞継・永澤 康滋・苗村 みえ
 並木 温・西原 憲二・西宮 常代
 西村 吉之・西村 千秋・西田 隆寛
 西牟田 守・西澤 茂樹・根本 哲生
 根本 優子・野見千鶴子・野上和加博
 野中 杏栄・野中 博子・蜂ヶ崎令子
 荻原 泰・花岡 晋平・橋詰 直孝
 橋口 玲子・原 まどか・原山 国秀
 原沢のぞみ・原田 孝・原田千鶴子
 原田裕美子・早原 千鶴・長谷川和寿
 長谷部孝子・半藤スミ子・林 佳子
 林 鴻程・濱中知恵子・馬嶋 順子
 久田 和子・土方 淳・樋口志津子
 蛭田 啓之・平山玖美子・平田 徹
 平野敬八郎・平野 盛久・平野 陽子
 福島富士子・古田 寿昭・藤井 昭夫
 藤森 芳史・藤本 愛・藤野 秀美
 布施 正博・福永 淳治・堀 順一
 堀口 公美・細澤 幸代・細澤 裕子
 星 恵子・星出 陽子・星田 宏
 星野 恭子・星野 志織・堀之内八千代
 馬するみ子・松尾 賢二・松原 龍弘
 松山 穂豊・松田 直行・松島 英乃

牧田みどり・牧野 道子・宮崎 裕子
 宮島 良征・三坂 直温・三宅 三
 三登 和代・三木 延義・水吉 秀男
 水谷 礼子・水野 惇子・村川 公一
 村川世津子・村井 貞子・武藤 里志
 盛田 俊介・守田 正三・守屋 栄
 森 紘子・森 克彦・森澤 豊
 百瀬せつ子・望月 祐一・望月 陽子
 八代 博子・柳瀬 達夫・山澤 一郎
 安土 達夫・安島秀十知・山下 育子
 山下 弘文・山下 香澄・山下 美玉
 山口 美穂・山村 憲・山田わか子
 山田 輝代・山田耕一郎・山田美智子
 山本 温子・山本 昌彦・山崎 純一
 柳 恵子・柳川 忠二・湯浅 玲奈
 湯澤 俊・吉川 芳登・吉田 友英
 吉永 克己・吉田 計夫・吉田 宏重
 吉田 正己・吉田 直樹・横山 祐作
 龍 紀子・龍 倫之助・渡辺 明彦
 渡邊 嘉行・渡邊 享子・渡邊 善則
 若田 宣雄・若林 美子・和田 恵子
 和田 俊洋・鷺澤 尚宏・鷺澤 祐子
 青梅市あゆみの会 会長 尾根 清美
 青梅市重症心身障害児(者)を守る会 会長 朝長 靖子
 入間川病院・洵石沢工業所・ウイズ(株)
 弁護士法人ウイズ
 医療法人社団 永生会 永生病院

(株)エクセル・サービス
 ボランティアグループ・桑の実・川崎
 (有)クリーンワーク・(株)コンテス
 (株)幸和義肢研究所
 三七会
 (東邦大学薬学部昭和37年卒同期会)
 一般社団法人 東邦大学理学部鶴風会
 吉田 茂雄
 一般社団法人 東邦大学医学部東邦会
 一般社団法人 東邦大学理学部鶴風会
 一般社団法人 東邦大学理学部鶴風会
 東邦大学看護同窓会
 トマトの会 代表 塩野 多佳子
 (株)東新商会
 東京医療クリーン事業協同組合
 中村建設(株)・馬場クリニック
 社会福祉法人同愛会 日の出福祉園
 日の出町 手をつなぐ親の会
 ファイナンシャルアライアンス(株)
 西東京支店 杉林 勤
 (株)増田禎司商店・前沢医院 砂入美穂
 医療法人社団敬聴会祐天寺
 松本クリニック
 医療法人社団 嘉明会 横浜東邦病院
 (有)吉沢薬品 吉沢調剤薬局
 通所 保護者会
 社会福祉法人 鶴風会後援会
 匿名



コストコホールセールジャパン(株)入間倉庫店様から寄贈

社会福祉法人鶴風会へ
 寄贈品ご芳名
 令和5年7月～令和6年2月
 7名(五十音順・敬称略)

野菜類 武村青果店
 スチーマー 東京馬主協会
 マスク 武蔵村山市
 りんど 大鰐町農業青年会議
 株式会社 一如社
 福豆 東京都保健局
 個人防護具
 利用者用衣類 コート(ホールセールズ)(株)